



筑紫女学園大学リポジット

アダム・スミス道徳哲学における「立場の想像上の
転換」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 筑紫女学園大学 人間文化研究所 公開日: 2024-12-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中野, 桂子 メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/2000037

アダム・スミス道徳哲学における「立場の想像上の転換」

中野桂子

“The Imaginary Change of Situation” in Adam Smith’s Moral Philosophy

Keiko NAKANO

Abstract

According to Adam Smith’s “*The Theory of Moral Sentiments*,” the imaginary change of situation which happens between the spectator and the person principally concerned is the foundation, from which the sympathetic sentiments and the harmony of society arise. This paper aims to describe that the imaginary change of situation depends on our imagination and it is formed by habit and education.

Smith says “it is by the imagination only that we can form any conception of what are his sensations. Neither can that faculty help us to this any other way, than by representing to us what would be our own, if we were in his case.” Therefore, we strive to render as perfect as possible, the imaginary change of situation. By this change, sentiments of the spectator and person principally concerned, may, it is evident, have such a correspondence with one another, as is sufficient for the harmony of society. Though they will never be unions, they may be concords, and this is all that is wanted or required.

In Smith’s moral philosophy, the imaginary change of situation flows through his books, “*The Theory of Moral Sentiments*” and “*The Wealth of Nations*.” In short, by the imaginary change, our community is founded. Of course, this imaginary change depends on imagination, and it is formed by habit and education. The former is the habit of society and conversation. The later is education of literature, art, history, rhetoric, and so on. Both of them give the vivacity of our imagination, or language.

In conclusion, Adam Smith makes clear through “the imaginary change of situation” that labor is the real measure of the exchangeable value of all commodities and laborer is alienated from labor in progress of the division of labor. Therefore, the vivacity of imagination is the important subject of education in Smith’s moral philosophy.

Keywords : アダム・スミス (Adam Smith)、立場の想像上の転換 (the imaginary change of situation)、習慣と教育 (habit and education)、想像力 (imagination)、道徳哲学 (moral philosophy)

はじめに

アダム・スミスは、その著『道徳感情論』の第1章「共感について」のなかで、次のように語っていた。

われわれは、他の人びとがどのように感じているかについて直接の経験をもたないので、彼らが感動するやり方については観念を形成することができない。それがありうるのは、同じような立場にあるとき、われわれ自身が何を感じるであろうかと思ひ浮かべることである。

かりに、われわれの兄弟が拷問台の上にあっても、われわれが安穩にしているかぎり、彼が受けている苦痛をわれわれの感覚によって知ることは決してありえないであろう。感覚は、われわれ自身を離れて働くことはいまだありえなかつたし、またありえないことである。したがって、他人の感覚がどのようなものであるかについて、われわれが何らかの概念を形成することができるのは想像によってのみである。その働きは、もしわれわれが彼の場面にしたとすれば、われわれ自身どのように感じるであろうかと思ひ浮かばせるといふという方法でしか生じない¹⁾。

スミスは、これを観客 (spectator) と当事者の間に起こる「立場の想像上の転換」²⁾ と表した。これは、スミスが「共感が基礎づけられている立場の想像上の転換」³⁾ としていたように、共感を促すものでもあったが、スミスが何よりも求めていたのは、この「立場の想像上の転換」であった。この転換によって、「すべての注意深い観客 (spectator) の心に、他人の立場に対する思い、そしてその人間と似通った感情が現われる。」⁴⁾ のであった。したがって、「立場の想像上の転換」は、スミスにおいては、市民の共同社会を形成する要諦であった。すなわち、「立場の想像上の転換」によって、当事者の立場が観客に共有され、「観客と当事者との感情が社会の和合に至るほどに相互に通い合うことは、明らかである。彼らの感情は決して合一とはならないにしても、協同といえるものであり、これが社会が必要とし、もしくは要求していることのすべてである」⁵⁾。

スミスの『道徳感情論』は、その副題に「人びとがまず隣人の行為と性格について、さらに自分自身の行為と性格について、自然に判断を下す場合に、依って立つ諸原理の分析を目的とするひとつの試論」とあるように、現実の具体的な立場の分析から進められている。すなわち、スミスは前もって仮説としての理論を立て、それを構成する概念に視点をおいて、論理を展開しようとはしていない。そのため、『道徳感情論』は具体的な事例の集積のような観を呈している。これは、スミスの著『諸国民の富』にも表われている。このため、両書の架橋が消失して、『道徳感情

論』を道徳の書、『諸国民の富』を経済の書と分けて見ることになる。それだけではない。両者を分断したうえ、ほとんど、『道徳感情論』を看過ないし無視してしまうのである。かくして、『諸国民の富』は独立した経済の書となる。

だが、スミスは『道徳感情論』と『諸国民の富』が分断して見られることを決して望んではいなかった。スミスにおいては、両書にはゆるぎない架橋がある。両書は、いずれも人間の共同体の形成を試みたものであり、それを可能にするのは、「立場の想像上の転換」である。具体的な事例が集められた、まわりくどい記述の中にも、両書には「立場の想像上の転換」が込められている。本論文は、「立場の想像上の転換」に照準を置き、これが何を意味し、どのような働きを有しており、かつ、それがいかにして社会共同体の形成に資しているのか。そして、これが教育の射程に置かれるとすれば、それはどのようにして可能であるのかを問うことになる。なお、「立場の想像上の転換」を問い、その意味と働きを明らかにした試みはないので、スミス研究のみならず、現代社会の教育にも何程か資することになれば幸いである⁶⁾。

1. 立場の転換

スミスが立場の転換を語るとき、この立場は位置とか場所ではなく、社会の中にその人が置かれた立場、境遇である。ここには地位、身分、富、家族などがあり、スミスがいう立場の転換は、そうした異なる社会的関係にある者の立場が他者の立場へ転換されることである。もちろん、立場はその人が依って立つ社会的属性に限らない。立場は、その人が社会的関わりの中で、社会に対して生きるその人自身の直接的関わり、その人が行動しなければならない経験の総体である。スミスはそういう立場の転換を語っている。

スミスは、立場の転換を経て共感が現われると見ていたが、共感とは、たんに当事者の苦しみや悲しみに出会ったからといって現われるのではない。苦しみや悲しみは、感覚生理上の痛みやたんなる感情として現われるのではない。それは、つねにある立場の中で現われる。観客が当事者の苦しみや悲しみを自分のことのように感受するのは、それぞれの立場を生きる観客と当事者において、観客からの立場の転換が起こるからである。なお、スミスは、すでに立場を失っている「死者に対してさえ共感する」⁷⁾とされていた。それは、スミスによれば「われわれが、彼らに生じた変化、かような変化についてわれわれの意識を結びつけることから現われ、彼らの立場にわれわれ自身を置くことから現われる」⁸⁾からである。たしかに、死者には経験の総体としての立場は失われている。しかし、死者といえども、物体ではなく、かつて立場を生きた者であり、今も生者と分かち難い者として、何ごとかを現わし、語りかけている。それゆえ、死者は、今も立場に在るかのように現われ、観客の共感を誘うのである。さらに、スミスは、遠方の人や歴史上の過去の人びとも共感するという。彼らもまた、いまも立場にあるかのように現われるからである。ここでも立場の転換が生じ、共感が現われる。スミスによれば、これは「間接的共感」⁹⁾というべきものであった。

もちろん、スマスがいう立場の転換は交換ではない。立場は1人ひとりが生きる場である。スマスが言う立場の転換は、観客が当事者の立場に自分を置いてみるとすれば、という仮定の上になり立っている。それによって、あえて、観客は当事者の苦しみや悲しみを共有することができる。したがって、立場の転換は観客のためにあるのではない。観客は報いを求めてはいない。スマスは語る。

なお、この想像上の立場の転換は、私自身の身の上や在り様に関わってではなく、私が共感する当事者のその人の身の上や在り様に関して起こると考えられる。

1人息子を亡くした人に私がお悔やみを言うとき、その人の深い悲しみに移入する (enter) ために、かような在り様と職業をもっている者である私が、もし1人息子をもっていて、その息子が不幸にも亡くなったとしたならば、私はどれほど辛い思いをするであろうか、と考えるのではなく、もし私が実際にその人であり、私とその人と境遇を転換するだけでなく、身の上や在り様を転換するとすれば、私はどれほど辛い思いをするであろうか、と思うのである¹⁰⁾。

スマスにおいては、立場の転換は私の感情を他者に移入することではない。立場の転換は、他者の立場を共有する働きである。すなわち、立場の転換には転換を試みる者の立場がある。その者は、自己の立場を保ったまま、他者の立場へ移動し、他者の立場に身を置くのである。スマスは、そうしたことが可能であるとする。これは、演劇において、演者が演劇上の人物を演じていることを想起すれば明らかである。たとえば、演者は、一旦舞台に立つや否やその人物として、人物になりきって現われる。しかし、演者は、もし彼が名人の境地に在るとすれば、当の人物になりきって人物の立場を演じながら、同時に自己がいま・ここで演じているのだということを忘れてはいない。ここには能でいう離見の見というべきものが現われている。スマスが語る立場の転換にはこのような理解がある。

もっとも、演劇における人物の立場は演者の想像によるとはいえ、一過性のものである。すべての演劇は、きまった時間に切り上げられる。演者はこの時、現実の立場に戻る。この意味では、演劇における立場は、擬似的立場である。他方、現実における立場の転換は、演劇のそれと同じように想像上の転換であるとしても、転換の対象となっているものは現実の立場であるので、それは共有され生き続けるのである。

2. 想像力

スマスにおける立場の転換は想像上の転換である。

観客は、自分の知り合いのあらゆる状況を最も詳細な出来事にまで看過してはならない。そして、彼の共感が基礎づけられている立場の想像上の転換を、できるだけ完全に行うよう

に努力しなければならない¹¹⁾。

スミスにおいて、立場の想像上の転換は即座に生じることもあるが、第三者である観客にとっては、努力しなければ現われ難いものである。したがって、観客は当事者の立場に出会ったとき、まず、その立場を意識し、転換を想像力によって果たすよう努力しなければならないのである。それゆえ、立場についての意識が先行する。意識には何かを志向する働きがある。想像力はこの意識の志向する働きである。しかも、想像力は、立場の想像上の転換において、つねに観客が当事者であれば、という仮定として現われる。この仮定において、観客はいま・ここに在る自己の立場を超えることができる。それゆえ、観客は死者に対してさえも、立場の転換を行うことができるのであった。ちなみに、メルロ＝ポンティは、「およそ〈想像する〉ということは、現前するものの中に不在なものを出現させることであり、そこには存在していない対象に〈擬似現前・魔術的現前〉を与えることなのです。」¹²⁾と述べたことがあったが、スミスが語っていた死者の立場への想像上の転換は、こうした不在のものの擬似的現前ということができる。そうであるから、サルトルも想像力が果たす役割を力説していた。すなわち、「私たちは今やある意識が想像力を振り得るために必要な本質的条件を把握する。それはつまり、意識が非実在的定立作用を措定し得る力をもたねばならない、ということである」¹³⁾と。

スミスが語る「立場の想像上の転換」は、想像力による擬似ないし仮定の現前、すなわち当事者の立場の想像上の共有である。この想像力は、不在の者にも現に生きている人の立場にも向けられる。これが共感となって現われることになる。もちろん、スミスにとって、こうして現われた共感が無力であるということではない。それは観客の感情をも揺さぶるのである。かつて、ベルクソンは「私はそれらの状態に共感をもち、想像力を働かせて私自身をその状態に移し入れる」¹⁴⁾として、想像力は「対象の内部に入り込む」働きであると解していたが、「立場の想像上の転換」は仮定によるものであるとしても、一旦それが生じると、現実のものとして当事者の内部にも迫りうるのである。なお、それゆえ、スミスは立場の想像上の転換を行うように努力せねばならないとしたのであったが、このことは、スミスが立場の想像上の転換を倫理の問題として提示したわけではない。かつて、シェーラーは「共感の倫理」の項において、「共感は、人びとに可能な形式のいずれにおいても原理的に価値盲目的である」¹⁵⁾として、スミスを批判した。しかし、スミスは共感の倫理を語るつもりはなかったし、また共感が価値盲目的であるとしたこともなかったのである。

スミスにおいては立場の想像上の転換及びその帰結としての共感、当事者に対する観客（第三者）の意識に端を発している。これは意識が価値盲目的であるとの謂ではない。この意識は自然の原理に支えられている。スミスは語る。

人間は、どれほど利己的（selfish）と見られようとも、その本性（nature）の中には、他人の運命に心配り、他人の幸せを見ることが気持ちがいいということの他に、何ら得ること

がないにしても、彼らの幸せが自分自身にとってなくてはならないと思わせる何らかの原理 (principle) があることは明らかである¹⁶⁾。

スミスが語る原理は、その原理という意味において、それ以上分析し、明らかにすることが困難なものであるが、すくなくともこの原理は、スミスの師ハチスンが唱えた道徳感 (moral sense) ではないことは明らかである。ちなみに、ハチスンによれば、道徳的行為の原理は「道徳的卓越性とその至高の目的を知る能力」¹⁷⁾ である。スミスの自然の原理は、まさに自然であって、これは定義できるものではなかった。スミスは自然の原理そのものではなく、それに支えられた想像力について語っている。

われわれの称賛や怒りを刺激するのは、現実になれわれに利益を与えたり、損害をもたらせたりするものに関する出来事ではなくて、もしも、われわれが、社会においてかかる仲間たちと共に活動するとすれば、おそらく得をしたり苦しんだりするかもしれない概念 (concept) あるいは想像である¹⁸⁾。

スミスは、身近な人のみならず遠方や過去の人物に対する想像について語ったのであるが、この想像を概念とも見ている。スミスは想像力をロックからヒュームに至る脈絡のなかでとらえているのである。したがって、概念は観念、すなわち言葉である。ちなみにロックは、観念は言葉であると語る。

すべての人は、自分が考えていることを自ら意識している。また彼が考えている間、彼の心が向けられているのは、そこにある諸観念であるから、人びとが自分たちの心のなかに、白さ、堅さ、甘さ、思考、運動、人間、象、軍隊、酪酊、その他の言葉で表わされるような、いくらかの観念をもっていることは疑いようもない¹⁹⁾。

さらに、ロックの衣鉢を継いでいるヒュームは、「記憶、感覚、そして知力も、それゆえ、そのすべてが想像、すなわちわれわれの観念の活性に基づいている」²⁰⁾ という。ヒュームと親交のあったスミスにおいても、想像力が言葉の活性であると見られていることは明らかである。言葉によって、人は、いま・ここ、いわば自己中心的な立場を超え出ることができる。もちろん、いま・ここは、知覚と認知と感情が現われる経験の総体であるから、想像力はそういう総体を超える力である。したがって、これは言葉による言葉の新たな立場への飛翔である。

3. 共同体の形成

共感を喚起する立場の想像上の転換は、利己的なものから生まれることはない。スミスにとっ

て、「共感は、しかしながら、いかなる意味においても利己的原理とは見なされえない」²¹⁾のである。それゆえ、立場の想像上の転換は、いま・ここにある自己中心的立場のみならず、利己心の私的立場をも転換して超え出るのである。スミスは、利己的情感について語る。

社会的情感及び反社会的情感という二つの相反する情感群のほかに、両者の中間的位置にあるといえる、もうひとつの情感群がある。すなわち、それは、社会的情感群のように非常に優雅であることもなければ、反社会的情感群のように非常に不快であることもない。悲しみと喜びは、それがわれわれ自身の私的な幸・不幸のために感受されているとき、これは第三の情感群を構成している²²⁾。

スミスが「利己的原理」としていたように、利己的情感は人間において普遍的なものである。利己心は、一人ひとりの生存、すなわち衣食住の欲求であると目されている。これは、立場の想像上の転換を拒むものではない。もっとも、社会的情感や反社会的情感について、スミスは立場の想像上の転換を語ってはいない。とりわけ、反社会的情感、たとえば「憎悪や報復感」²³⁾を抱いている観客が他者に立場の想像上の転換を行うことは容易ではない。また、そういう観客に立場の想像上の転換を勧めることは困難である。

なお、スミスは「自己欺瞞の性質について」の章で、「われわれ自身の利己的情感の暴威と不正」と語り、「われわれ自身の激しい諸情感は、たえず、われわれをわれわれ自身の場面に呼びもどそうとする。そこでは利己心によってあらゆるものが誇張され、歪められて見える。」²⁴⁾と述べていた。スミスによれば、われわれ自身の激しい諸情感が利己心を恣意的なものへ変え、それによってあらゆるものが度を越して見られ、歪められて見えるようになるのである。それゆえ、スミスにおいて、利己心は自然の原理であるが、それはゆるぎない実体ではない。たしかに、利己心は、他者との関わりが一義的であって、いま・ここにとどまろうとする働きである。したがって、利己心は他者から離れ、他者を退ける働きでもある。だが、利己心は立場の想像上の転換によって他者に開かれうる。スミスは、このことを『道徳感情論』のなかで述べている。

富者は貧乏人に比べてわずかばかり多く消費するだけであって、生まれつきの利己性と貪欲にもかかわらず、いわば自分だけの利便をもくろみ、彼らが雇っている数千人の人びとの労働によって、手に入れようとしているただひとつの目的が、彼ら自身のむなしい、あくことを知らない欲望の満足であるとしても、彼らは自分たちの改良のあらゆる成果を貧しい者に分配する。彼らは見えざる手(an invisible hand)に導かれて、もしその土地がその他の住民の間に等しい割合で分割されているとすれば、そうであったと思われるほどに、ほとんど同様の生活必需品を分配するようになる²⁵⁾。

スミスは『諸国民の富』においても、同様なことを語っている。

それぞれの個人は、自分自身の利益を意図するだけであって、彼はここで他の多くの場合と同じように、見えない手に導かれて、彼の意図のどこにもなかった目的を促進する。そのことは社会にとって必ずしも悪いことではない。彼は自分自身の利益を追求することによって、彼が本当にそうしようとするときよりももっと効果的に社会の利益を促進することさえある²⁶⁾。

スミスは、彼と同時代のマンデヴィルを熟知していたが、見えない手はマンデヴィルの学説とは異質のものである。ちなみに、マンデヴィルは、その著書『蜂の寓話——私人の悪徳は公共の利益』²⁷⁾において、利己心、貪欲、虚栄心という悪徳は社会の繁栄や公共の利益であると説いたのであった。スミスは、「これは、マンデヴィル博士の著作の大きな誤りである」²⁸⁾と批判する。そもそも利己心が悪徳で、悪徳が公共の利益になることなどありえないことであった。また、スミスは利己心が公共の利益になるのは利己心が利他的なものに変わるからであるとしたことはなかった。利己心と利他心とは別の働きであって、それゆえ、スミスは「われわれのすべての感情が利己心を何らかの方法で純化することから起こると考えたがる人びと」²⁹⁾を批判したのである。

スミスにおいては、利己心は見えない手に導かれて、意図しないうちに、結果として貧しい人びとに富を分配し、社会の利益を促進するのである。もっとも、こうした論述は様々な解釈を誘うことになる。たとえば、ラッセルはこの論述を次のように解していた。

スミスは、しかしながら、常識の範囲内で個人と社会の利益は、およそ調和していること、そして、啓蒙された利己心 (enlightened self-interest) は慈愛心が求めた行為と同じ行為を求めていると信じていた³⁰⁾。

スミスが語る利己心は、社会および反社会的感情の中間的位置にあるものであったが、そうであれば常識の範囲内で相互の利己心は調和することができ、結果として社会の利益を促進することも可能である。そうでありうるのは、常識が利己心を啓蒙するからである。だが、ラッセルが解するような啓蒙された利己心は利己心の純化であり、それはスミスが批判したことであった。スミスには、啓蒙された利己心などありえないのであった。

スミスが「見えない手に導かれて」というとき、ここには個人の意図が排除され、何か他の力が働いていることが語られている。このことについて、シュヴァイツァーはこう語っていた。「アダム・スミスは、その富を何はともあれ利己心 (Egoismus) のあらゆる方面における自由で合理的な諸活動に基礎づけている。経済的な問題における倫理の役割については彼は何も言っていない。」³¹⁾と。ラッセルが常識の範囲内としたところを、シュヴァイツァーは自由で合理的な諸活動という。したがって、ここには個人の意志が働く倫理は現われようもない。この理解を無条件に受容すれば、スミスは自由放任経済を説いていることになる。なお、ラスキは、自由で合理的な諸経済活動について、次のように語った。

スミスが描いている人間は富を追求する人間である。すなわち、経済的動機がこの人間の行動を支配するとの命題がある。……まさにスミスが行っていることは、妨害されない限り、人間の幸福を確かにする方向へ働く自然経済の秩序があると仮定することである。³²⁾

さらに、マンハイムは、自然経済の秩序を具体的に表して見せる。すなわち、技術の進歩—利潤の増加—資本の増加と労働の需要—賃金の増加—出産率の向上—労働供給の増加—分業の進行—技術の進歩である³³⁾。この流れは、自動し、循環する。もちろん、この自然経済秩序は神の一撃によって世界が動くとする理神論や自然科学の法則のようなものではない。これは仮定である。この仮定は、常識といえるものをモデルにしている。ラッセルは見えない手を常識の範囲内で生じる調和ととらえたが、スミスにとっては常識という現実そのものから導かれたものである。

スミスは「富裕の自然的進歩について」の章で、「人為的な諸制度が、それゆえ、ものごとの自然の成り行きを決して乱さなかったならば、あらゆる政治的社会において、都市の増大する富と発達は、領地あるいは農村の改良と耕地の結果として、かつそれに比例して生じたであろう。」³⁴⁾と述べた。スミスにおいて、富を追求する利己心は自然の原理である。この自然の営みを人為的諸制度が妨げなければ、利己心が求める利益は公益になりうるとの仮定がスミスにはある。この仮定は、空想上のユートピアを描いたものではなく、スミスが生きた社会をモデルとしたものである。ただし、「人為的な諸制度が、それゆえ、ものごとの自然の成り行きを決して乱さなかったならば」というとき、その自然の成り行きは、現に社会に進行している動きを前提としているからである。すでに、スミスは『道徳感情論』において、富者は貧乏人に「生活必需品を分配するようになる」と述べていたが、当代の人びとが求めていたものは「生活必需品」であった。したがって、利己心の対象は「生活必需品」である。ちなみに、これはヒュームにも見ることができる。すなわち、ヒュームは「できることなら、各人は、すべての生活必需品と多くの生活便益品とを十分にもつことによって、自分の労働の果実を享受すべきである。」³⁵⁾としたのであった。

アシュトンによれば「当時の中心問題は、以前よりもはるかに多くなった子どもたちの代を、いかにして食べさせ、着せ、雇用するかということであった。」なお、こうした事態は、「その支配者によってではなく、まさに、新しい生産用具と産業の経営方法を発明するだけの機知と資金をもって、自分自身に当面する目標を追求しようとしていた人びとによって救われた。」³⁶⁾のである。スミスが富者というとき、それは大土地所有者である特権支配者、すなわち不労所得者層ではなく、機知と資金をもって当面する目標を追求していた人びとであった。当面する目標は、富、すなわち生活の必需品であったので、富者は自ずからであれ、計らずであれ、必需品を貧しい者に分配する。生活の必需品は、個人の生存の安全や安心のために人びとが求めてやまないものであって、これはそのまま社会の安全・安心になるのである。スミスの見えない手は、社会のこのような現実を映したものであった。ちなみに、フィリップソンはそのことを次のように語っていた。「彼らが便益や秩序を求めるのは」「これは境遇に対する反応でありながら、意図せぬにせよ文明の進歩にとって有益な結果を伴うものであり、スミスがもっと詩的な表現をしている箇

所であれば、〈見えざる手〉のはたらきによるものだと言っていたらう」³⁷⁾。ここでは、私益は公益、公益は私益になるのは自明のことであったのである。

スミスが見た社会は、働くことが実りあるものになりうる社会であった。ヒュームが述べていたように生活必需品を十分にもつことによって、自分の労働の果実を享受することが可能であった。スミスはそのことを語っている。

したがって、およそ、ある商品を所有してはいても、自分では使用あるいは消費しようと思わず、他の商品と交換するつもりの人にとって、商品の価値は、その商品によって購売または支配することのできる労働の量に等しい。それゆえ、労働がすべての商品の交換価値の真実の尺度である。

あらゆる物の実質価値、すなわちあらゆる物が、それを手に入れようと望む人に支払わせるものは、それを手に入れるための労苦と骨折りである³⁸⁾。

自分の労働の果実を享受することができるのは、自分の労苦と骨折りに見合うだけの報い（賃金）を得ることである。スミスは、彼が生きた社会の中で、そうしたことが現われていたのを見たのであった。もっとも、「労苦と骨折り」、すなわち「労働がすべての商品の交換価値の真実の尺度である」という命題は、後代に生き続けることになった。ちなみに、シュンペーターは「スミスが『企業家』について確かに語っているにもかかわらず——企業家や産業家の独自の機能は豪も認められていない。」と述べ、「この点は、さらにスミスがわざわざアンダーラインをして強調したところであるが、そのマルキシズム的含蓄が明白なものである。」³⁹⁾と語っていた。さらに、バナールは、このことについて明確に述べたことがある。

もっとも重要なものは、生産物の価値に対するスミスのあつかいかただった。それを彼は働かずに報酬をもらう権利があると生活する宮廷人や教会人や地主に向けられたものであった。ところがその後19世紀になると、この学説と同じ論理で資本家に向かってもちいられるおそれがでてきたので、正統派経済学者のあいだでは評判が悪くなった。事実、剰余価値の観念は、彼にマルクスが生産物の価値と生産者に支払われる賃金の差であることを示したのだが、すでにアダム・スミスのなかに暗に含まれていた。⁴⁰⁾

スミスは、彼が見て経験した現実から、モデルを取り出し、描いて見せたのである。もちろん、スミスが見た現実には、働く者がその労苦と骨折りの見返りに、報酬としての賃金を得るということだけではなかった。働く者は生産物を購入した人びとから賃金だけではなく喜びをも受けとることができる。すでに見たように、スミスにおいては人間の本性のなかに、「他人の幸せを見ることが気持ちがいいということの他に、何ら得ることがないにしても、彼らの幸せが自分自身にとつてなくてはならないと思わせる何らかの原理がある」のであった。この原理は、働く者がその生

産物を購入する人びとを想い、また、購入した人が働く者の労苦と骨折りを想い、相互に、立場の想像上の転換を可能にするものである。立場の想像上の転換は、スミスが見た現実に現われているだけではなく、いつ、いかなるときにおいても現われうるものであったのである。

しかしながら、スミスは社会の動きがいつまでも続くとは見ていなかった。したがって、見えない手に象徴される自然の社会的秩序という仮定がいずれ崩れるであろうことは知っていた。それは分業のなかに、すでに現われていたのである。スミスは語る。

分業が進行すると、労働によって生業を立てている人のはるかに大部分、すなわち人民の大きな集団の仕事が、きわめて単純な少数の作業に、ときには1つか2つの作業に限られることになる。ところが、大部分の人びとの理解力は、彼らの日頃の仕事によって必然的に形成される。一生を少数の単純な作業をすることについやし、それらの作業の効果も、おそらくつねに同じかそれに近いものであるような人は、彼の理解力を働かせ、発明力を発揮させる機会をもつことができない。そこでは、様々な問題が決して生じないので、それを除去する手段を見つけ出すことができない。こうして、彼は自然にそのような働きの習慣を失い、およそ人間として成りうるかぎりおろかで無知になる。彼の精神はまひして、いかなる理性的会話を楽しむことも、それに参加することも、いかなる寛大、高貴な、やさしい感情も、もつことができなくなる⁴¹⁾。

周知のように、スミスが指摘したことは、後にマルクスに受け継がれ、労働の疎外として明らかにされたものであった。ちなみに、マルクスはこう語った。

かれはそのために労働をいとむあいだ自分が肯定されていると感じるどころか、否定されていると感じている。かれは幸福感を感じないで、不幸を感じる。自由な肉体的および精神的エネルギーを発揮しないで、かえって肉体をそぎ、精神を破滅させる⁴²⁾。

スミスは、自然の経済的秩序が労働の変容から崩れることを想像していた。これによって、スミス自身が描いた共同体に危険が近づいていることも知っていた。スミスにとって、これを救う途があるとすれば、それは究極のところ想像力であった。

4. 想像力の形成

ロックをはじめとして、ヒュームやスミスにおいては、想像は観念もしくは概念であった。これは言葉である。言葉は無から有を生み、それによって世界は限りなく広がる。したがって、想像力は言葉によって宏大無辺へ向かう働きである。ヒュームが「われわれが想像できるものは何であろうと存在しうる。これは明白な原理である。」⁴³⁾としたのも諾うことができる。この想像

について、スミスは「想像の諸原理は、われわれの美の感覚がこれに支えられているのであるが、これはきわめて微妙で繊細な性質を有したものであって、習慣と教育によって容易に改変されうるであろう。」⁴⁴⁾ という。これによれば、想像力は貧しくも豊かにもなりうるものである。もちろん、スミスは想像力が豊かに形成されることを望んでいる。そのためにスミスは習慣が果たす力に着目する。習慣は社会共同体において現われるもので、スミスが念頭においていたものは一般的な社交 (general sociality) および、そこで現われる会話 (conversation) であった⁴⁵⁾。スミスは、そうしたことが可能であった共同体を目にとめていた。この共同体については、アシュトンが明らかにしている。

18世紀では、社会的目標の一般的手段は個人や国家ではなく、クラブであった。居酒屋のおしゃべりクラブからコーヒー店の文人グループ、田舎屋の『ボックス席』……から下層の風俗改善のための全国協会や万国親善協会にいたる様々の組織の中で人びとは成長した。あらゆる利害、伝統、希望が、共同のかたちで表明されていた。どうかして、人びとが自己中心的、貪欲で、また反社会的になっていたとする見方ほど、産業革命をあいまいにしている様々の伝説のなかで不可解といえるものはない⁴⁶⁾。

スミスは教育についてもふれている。もちろん、スミスの場合、教育は高等教育である。もっとも、スミスは「労働貧民」あるいは「庶民」の教育を看過したわけではなかった。スミスは、「庶民の教育は、文明の商業社会では、何程かの地位や財産のある人びとの教育よりも、おそらくもっと国の配慮が必要である。」⁴⁷⁾ と語った。

しかし、庶民は、文明社会ではどこでも、ある程度の地位や財産のある人たちのようにはうまく教えられないとしても、それでも、教育の最も基本的な分野、読み書き、計算は、生活の最も早い時期に習得できるので、最低の職業を身につけさせられうる見込みのある人たちでさえ、その大多数は、これらの職業に雇われる前に、それらを習得する時間はある。ごくわずかの費用で、国は、ほとんど国民の全体に、これらの教育の最も基本的な分野を習得する必要性を促し、奨励し、義務づけることさえできる⁴⁸⁾。

共同社会が庶民の教育を行うのは限りがあった。そのため、スミスはあえて庶民の教育を国に委ねようとしたのである。だが、スミスの提案が日の目を見るには百年を越えねばならなかった。

想像力の形成はスミスが大学教育で試みたものであった。スミスの『修辞学・文学講義』はそうした試みを表わしている。かつて、ロージアンは「この記述から見て、スミスは、熟慮の上で、……学生たちの思索能力よりはむしろ感情および美的感覚を刺激しようと試みたものであることは、明瞭である。」⁴⁹⁾ と評したことがあった。もちろん、スミスは自然科学や論理学などにも造詣があり、その論文「天文学の歴史」⁵⁰⁾ には「想像する」という言葉がくりかえし現われてい

る。だが、想像上の立場の転換は知への広がりではなく、情に入りこもうとする働きである。修辞学や文学はこの働きを喚起する。文学のなかには、それが演劇として演じられるものもある。いずれも、読む者、観る人を促して、想像上の立場の転換へ誘い、そこに描かれ、演じられている人物と共に、限られた時間ながらも生きられるようにする。しかも、文学や演劇においては、人は喜びのみならず悲しみや苦しみを主題としたものにも出会う。想像上であれ、悲しみや苦しみにふれた者は、現実に返ったとき、悲しみや苦しみを浄化され、想像力を豊かにするのである。ちなみに、スミスと同様な理解をホワイトヘッドは語ったことがあった。すなわち、「芸術や文学は生命の主たる活力に間接的に効果を及ぼすだけではない。直接に、芸術や文学は想像力を産むのである」⁵¹⁾と。

スミスはヒュームと同様に想像力及びその形成について、これ以上のことを語ってはいない。語る気も探究する気もなかったわけではなく、想像力自体が分析され、明るみに出されることを困難にするものであったため、スミスはそれ以上問わなかったのであろう。

むすび

スミスによれば、「哀れみや同情は、他人の悲惨さを見たとき、あるいはそれがきわめて鮮明に思い出されるときに感じる情感である」⁵²⁾。これは、スミスと交流のあったルソーの『人間不平等起源論』にある哀れみの情を念頭においたものであったが、スミスにとって、この情感が人間の自然の原理であることに異論はなかった。だが、現実には、悲しみや苦しみ、幸や不幸は、それぞれの人間の経験の総体、すなわち状況ないし立場において現われている。したがって、とりわけ第三者（観客）においては、悲しみや苦しみを生きる当事者の立場から直截に哀れみを喚起されることはほとんどない。それゆえ、第三者は立場の想像上によって当事者の立場に立つ他はない。このため、スミスは、立場の想像上の転換がありうること、また、そうあるべきであるとしたのである。ここで、スミスは立場の想像上の転換が立場の分有であることを語っている。

共感が、当事者と立場の想像上の転換から生じるというのは、まさに適切な言い方であるが、この想像上の転換は、私の境遇ないし私の役割において生じるとは想われない。そうではなく、これは私が共感する当事者の境遇や役割に生じると想われるのである⁵³⁾。

もし、私が実際に貴方であり、私が事情を貴方と転換するだけでなく、境遇のみならず役割までも転換するならば、私はどれほど苦しい思いをするであろうかと考えるのである⁵⁴⁾。

スミスにおける立場の想像上の転換は、観客が自分の立場に当事者の立場を転換することではない。これは、演劇で観客が演者の立場を自分の立場に転換しないことと同じである。たとえば、それは当事者が自分の1人息子を亡くしたとき、それにふれた観客が、もし自分の1人息子を亡

くしたらどう思うであろうとの謂ではない。観客は、あくまで当事者の立場に転換して、自分が当事者の立場にいるかのごとくなるのである。そうなるためには「努力しなければならない」とスミスは語った。この努力は観客のためとか当事者のためとかにあるのではない。すなわち、観客は自分のために立場の転換に努めているのではない。また、この転換が当事者を喜ばせ、悲しみや苦しみを柔らげることになるかどうか観客は予想してはいない。この点で、観客から発される立場の想像上の転換には見返りないし報いはない。

フィリップソンは、スミスの『道徳感情論』と『諸国民の富』との関連を次のように表わしていた。

道徳とは、報いある感情の取引が成立すると期待しつつ行われる、感情の交換の問題であるということが明らかになった。スミスは道徳がやりとりされる市場の様子を描いたのであり、もともと彼の分析の主眼は、この原理におかれていたのである⁵⁵⁾。

フィリップソンによれば、道徳は「報いある感情の取引」、したがって「感情の交換」であり、これは「市場の様子を描いた」ものであるとされる。フィリップソンは『諸国民の富』に立って、『道徳感情論』を読み込み、それによって『諸国民の富』における経済市場の取引と『道徳感情論』における道徳とを繋ぎ止めようとしているかに見える。たしかに、スミスによれば、分業は「人間性の中にある一定の性向、すなわちあるものと他のものとの取引、交易、交換する性向の必然的帰結である」⁵⁶⁾ので、交換と分業が社会の相互協力を促すことにもなる。しかしながら、スミスにとって、道徳は感情の交換や取引ではない。スミスが「立場の想像上の転換に努めなければならない」としたとき、ここには転換による報いや報酬は念頭にも置かれていない。広義にとれば「立場の想像上の転換」は、当事者への観客からの贈りものともいえるが、これは想像の働きの結果であって、本来、立場の想像上の転換は、哀れみや同情のような感情あるいは金銭や物品を対象とするものでもない。いわば想像は他の何かに還元できない概念である。それゆえ、想像は具体的な立場において、何かについて想像するというとき、そこにどのような言葉が現われているかを問うことによって明るみに出す他はない。ちなみに、ウォーノックはウイトゲンシュタインの『哲学探究』から「ひとが何かを想像しているとされ、イメージとは何かとか、何がそこで起こっているのかと問うてはならないのであって、『想像』という語がどのように使われているかを問わなくてはならないのである。」⁵⁷⁾という文を引用していたが、これは正鵠を射ているといえる。

慈善家は哀れみや同情によって貧しい人びとに金銭や物品を送ることができるが、立場の想像上の転換はそうした贈与以前の、苦しみや悲しみにある人びと一般に行き渡る働きである。ところが、フィリップソンは、スミスがいう市場が取引、交換のなかに感情のやりとりを見ていたのである。たしかに、市場の生産物を介して、働く者とそれを供する者との間に相互依存、相互利益が現われる。すなわち、その労苦と骨折りによって働く者は生活の必需品を作り、市場を介

してそれを売り、その代償ないし報酬として賃金を得る。ここには労働と賃金との交換がある。ただし、交換はこれだけではない。働く者は自分の作品が一般の誰かに供されるであろうことを想像することができる。この作品がそれを手に入れた人に喜ばれるであろうかどうかとも想像することができる。もし、これがその人に喜びをもたらすのであれば、働く者はそれと交換した金銭の他に、その人の喜びをも手に入れることになる。手に入れた人の喜びが働く者への喜びへと返ってくる。ここには、他人の喜びが自分にとってなくてはならないように思われる原理が働いているのである。この意味では、フィリップソンが見たように、市場においても、生産物と賃金の交換のみならず、感情の交換も随伴するといえる。但し、これは随伴であって交換ではない。

スミスは道徳が感情の交換であるとしたことはなかった。まして、スミスにとって、立場の想像上の転換が交換になりうるはずもなかった。フィリップソンは『諸国民の富』に立って、そこで語られている交換をもって『道徳感情論』をとらえ、両者の一貫性を示そうとしたのであろう。だが、それは逆である。スミスにおいては、『道徳感情論』における立場の想像上の転換が『諸国民の富』の基底にあって、そこから『諸国民の富』が解説されねばならなかったのである。そうであるからこそ、スミスは『諸国民の富』のなかで、働く者に労働の疎外が起こることを指摘し、そこで、もし、労苦や骨折りに見合うだけの報いを得られない労働者の立場や、労働の内容が味気ないものであるため精神が麻痺して、会話を楽しむことさえできない労働者の立場に、私が立つとすれば、私はどう思い、感じるであろうかと問い、立場の想像上の転換を喚起することができたのである。

ただし、スミスは「立場の想像上の転換」が共同体の要であることを語りながらも、それがいかにして可能であるかを具体的に描いて見せてはいない。しかも、「立場の想像上の転換」は想像力によって起こり、それは習慣と教育によって培われるとしたにもかかわらず、その方法の記述に手を染めたこともなかった。それは、想像力そのものが分析できる概念ではなく、その形成については原理として鮮明にすることが困難であり、それについて語ることは控えざるをえなかったからであろう。

なお、スミスはヒュームの功利主義の倫理とは違った立場に立っていた。ちなみに、ヒュームは「道徳的な善と悪とを知らせる、両者を区別する印象は特殊な快と苦にほかならない。」⁵⁸⁾としたのであったが、これに対して、スミスは想像力が働く倫理を語っていた。この想像力は立場の想像上の転換とは異なる働きとして現われる。それでは、道徳においては想像力はいかなる働きをするのか。これは教育のなかで取り上げられうるものであるが、この問いに答えるためには稿を改めねばならない。探求されるべき今後の課題である。

注

- 1) A. Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, The 8th, London, printed for A. Strahan, and T. Cadell jun, and W. Davies, in the Strand, 1797, Vol.I, pp.2-3.

- 2) A. Smith, *ibid.*, Vol.II, p.330.
- 3) A. Smith, *ibid.*, Vol.I, p.38.
- 4) A. Smith, *ibid.*, Vol.I, p.38.
- 5) A. Smith, *ibid.*, Vol.I, p.42.
- 6) なお、類似したテーマに山口杉子アダム・スミスの道徳論—「想像上の立場の交換」に着眼して—
日本道徳学会編、1996年があるが、これは道徳教育に焦点をおいたもので、広く『諸国民の富』に及ぶ
探求に及んだものではない。
- 7) A. Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, op. cit., Vol.I, p.12.
- 8) A. Smith, *ibid.*, Vol.I, p.13.
- 9) A. Smith, *ibid.*, Vol.II, p.330.
- 10) A. Smith, *ibid.*, Vol.II, pp.330-331.
- 11) A. Smith, *ibid.*, Vol.I, p.38.
- 12) M. メルロ = ポンティ 『眼と精神』 滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、1967年、37頁。
- 13) J-P. サルトル 『想像力の問題』 平井啓之訳、人文書院、1970年、349頁。
- 14) H. ベルクソン 「形而上学入門」 坂田徳男訳 『世界の名著53』 中央公論社所収、1969年、65頁。
- 15) M. Scheler, *Wesen und Formen der Sympathie*, Verlag G. Schulte-Bulke Frnkfurt an Main, Fünftfe
Auflage, 1948, p.2.
- 16) A. Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, op. cit., Vol.I, p.2.
- 17) F. Hutcheson, *A System of Moral philosophy*, Published from the Original MS. by his Son Francis
Hutcheson, M. D., 1755, Vol.I, p.53.
- 18) A. Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, op. cit., Vol.II, p.330.
- 19) J. Locke, *Human Understanding*, In the Works of John Locke, Vol. I, 1823, Reprinted by Scientia
Verlag, Allen, 1963, p.82.
- 20) D. Hume, *A Treatise of Human Nature*, Reprinted from the original Edition in Three Volumes, Ed.
by L. A. Selby-Bigge, M. A. at the Clarendon Press, 1928, p.265.
- 21) A. Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, op. cit., Vol.II, p.330.
- 22) A. Smith, *ibid.*, Vol.I, p.93.
- 23) A. Smith, *ibid.*, Vol.I, p.74.
- 24) A. Smith, *ibid.*, Vol.I, pp.388-389.
- 25) A. Smith, *ibid.*, Vol.I, p.466.
- 26) A. Smith, *The Wealth of Nations*, the Modern Library, Random House, New York, 1940, p.423.
- 27) Bernard de Mandeville, *The Fable of the Bees :or, Private Vices, Publick Benefits*, At the clarendon
Press, 1924. 1st ed., 1714.
- 28) A. Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, op. cit., Vol.I, p.15.
- 29) A. Smith, *ibid.*, p.15.
- 30) B. Russell, *Freedom and Organization*, Allen & Unwin, London, 1949, pp.93-94. 1st ed., 1934.
- 31) A. Schweitzer, *Kultur und Ethik*, C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung München, 1953, p.79. 1st ed.,
1923.

- 32) H. J. Laski, *Political Thought in England*, Oxford University Press, Maruzen Company Limited, 1955, pp.191-192.
- 33) K. マンハイム 『変革期における人間と社会』 福武直訳、みすず書房、1968年、183～184頁。
- 34) A. Smith, *The Wealth of Nations*, op. cit., p.359.
- 35) D. ヒューム 『経済論集』 田中敏弘訳、東京大学出版会、1967年、24頁。
(D. Hume, *Political Discourses*, 1752.)
- 36) T. S. Ashton, *The Industrial Revolution*, Oxford University Press, Maruzen Company Limited, 1960, p.161. 1st ed., 1948.
- 37) N. フィリップソン 『アダム・スミスとその時代』 永井大輔訳、白水社、2014年、158頁。
- 38) A. Smith, *The Wealth of Nations*, op. cit., p.30.
- 39) J. A. シュンペーター 『経済分析の歴史』 東畑精一訳、岩波書店、1965年、396頁。
- 40) J. D. バナール 『歴史における科学』 鎮目恭夫訳、みすず書房、1967年、630頁。
- 41) A. Smith, *The Wealth of Nations*, op. cit., p.734.
- 42) K. マルクス 「経済学手稿－哲学手稿－」 三浦和男訳、『世界の思想Ⅱ－4』 所収、河出書房、1967年、100頁。
- 43) D. Hume, *A Treatise of Human Nature*, op. cit., p.250.
- 44) A. Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, op. cit., Vol.II, p.19.
- 45) A. Smith, *ibid.*, p.56.
- 46) T. S. Ashton, *The Industrial Revolution*, op. cit., p.127.
- 47) A. Smith, *The Wealth of Nations*, op. cit., p.736.
- 48) A. Smith, *ibid.*, p.737.
- 49) J. M. ロージアン 『アダム・スミス修辞学・文学講義』 宇山直亮訳、未来社、1972年、15頁。
- 50) アダム・スミス 『哲学・技術・想像力』 佐々木健訳、勁草書房所収、1944年。
- 51) A. N. Whitehead, *The Aims of Education and Other Essays*, Williams & Norgate Limited, London, 1929, p.91.
- 52) A. Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, op. cit., Vol.I, p.2.
- 53) A. Smith, *ibid.*, Vol.II, p.330.
- 54) A. Smith, *ibid.*, p.331.
- 55) N. フィリップソン、『アダム・スミスとその時代』 前掲書、200～201頁。
- 56) A. Smith, *The Wealth of Nations*, op. cit., p.13.
- 57) M. ウォーノック 『想像力』 高屋景一訳、法政大学出版局、2020年、229頁。
- 58) D. Hume, *A Treatise of Human Nature*, op. cit., p.477.

(なかの けいこ：初等教育・保育専攻 准教授)

